

ソルガム類の放射性セシウム濃度の品種間差

福島県農業総合センター 畜産研究所飼料環境科

事業名 放射性物質除去・低減技術開発事業
小事業名 飼料作物、家畜における放射性物質の吸収量の解明
研究課題名 ソルガム類における品種間差の解明
担当者 遠藤幸洋・吉田安宏・片倉真沙美・中村フチ子・武藤健司・菅野登

I 新技術の解説

1 要旨

未更新の畑地において、ソルガム類(10品種)の放射性セシウム濃度及び移行率を調査した結果、スーダングラス、スーダン型、ソルゴー型、兼用型、いずれの草種においても供試品種間で差はなかった。

- (1) 品種比較は、10品種(スーダングラス:2、スーダン型:1、ソルゴー型:6、兼用型:1)で実施した。
- (2) 放射性セシウム濃度(水分80%換算)は、20~31Bq/kgであり、各々の品種間に有意差はなかった(図1)。
- (3) ソルガム類の移行係数は、0.018~0.029であった(図1)。

参考値:牧草への移行係数0.1(IAEA1982年公表値)

2 期待される効果

ソルガム類の供試品種間で放射性セシウム濃度に差は認められなかったことから、利用調製目的(青刈、乾草、サイレージ)に応じた品種選定が可能となる。

3 活用上の留意点

- (1) 未更新の畑地(黒ボク土、放射性セシウム濃度1,000Bq/kg乾土、土壌の交換性カリ含量13mg/100g乾土、施肥量(基肥)N-P₂O₅-K₂O = 15 - 15 - 0)で実施した結果である。
- (2) ソルガムの栽培にあたっては、福島県施肥基準等を参考にする。

Ⅱ 具体的データ等

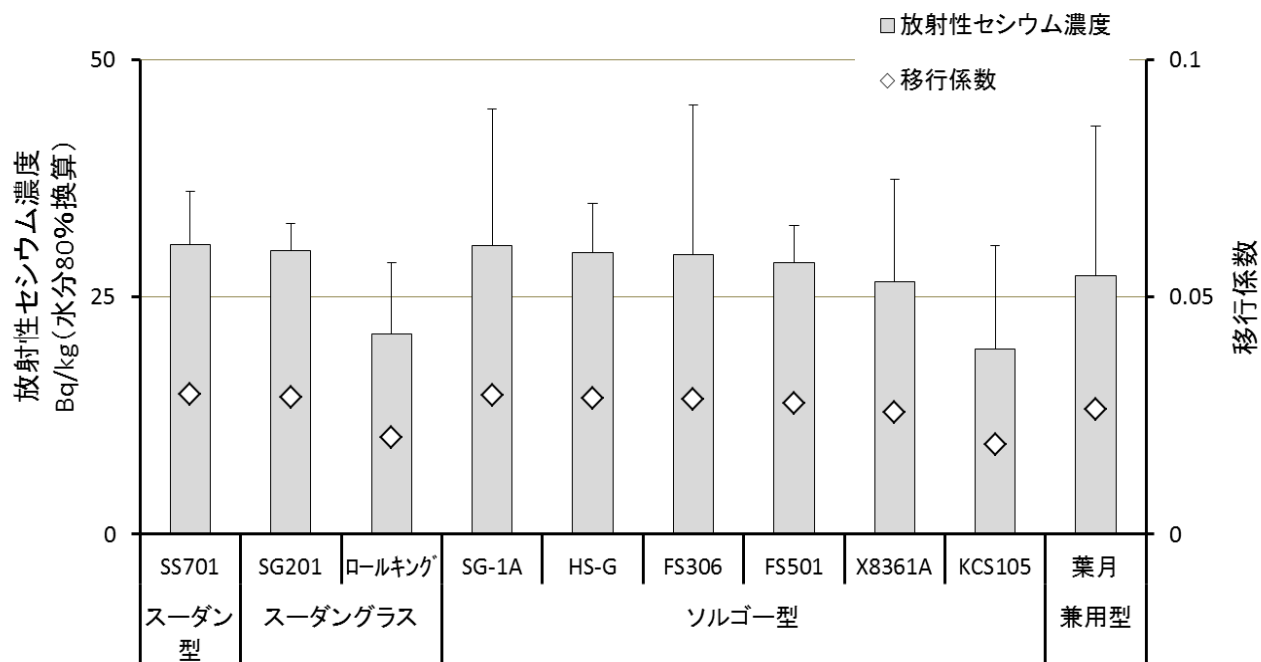


図1 供試品種の放射性セシウム濃度(平成24年度)

注1 品種間の放射性セシウム濃度は、Tukey法により有意差なし

Ⅲ その他

1 執筆者

遠藤幸洋

2 実施期間

平成24～26年度

3 主な参考文献・資料

なし